

乳幼児教育相談における母親の気持ちの変化

手塚 清・森 敬子

本校乳幼児教育相談（以下、けやきルーム）では、愛情と信頼感に基づいた、安定した親子関係を育てることを目指し教育相談を行っている。今回、けやきルームに通う前後での母親の気持ちの変化を把握するため、母親との面談で聞き取ったことをまとめた。その結果、教育相談前は漠然とした不安が多かったが、教育相談後は、我が子に対する具体的な不安が多くなっていることが分かった。また、けやきルームでは難聴の確定診断前の親子を受け入れた例が数件ある。どの親子も早期から教育相談に通ってくることで、親子関係は安定してきている。これらのことから、できるだけ早い段階からの教育相談が重要であるといえる。

キー・ワード：乳幼児教育相談 親子関係 母親の気持ちの変化 難聴の確定診断前の教育相談

1 はじめに

生後数日で実施する、新生児聴覚スクリーニング（以下、新スク）の普及により、難聴の早期診断が可能となっている昨今、療育や福祉に関する具体的な支援も早い段階から行われ、補聴機器の装用も速やかに行われるようになってきている。一方、家族は、これから親子関係を築いていくという大切な時期に大きな精神的ショックを受ける、という話をよく聞く。

けやきルームでは、子どもが母親や教師と楽しく関わって遊ぶことで、愛情と信頼感に基づいた安定した親子関係を育てている。そのためにも、できるだけ早期から教育相談を行うことが必要であると考えている。

今回、けやきルームに通う前後での母親の気持ちの変化を把握するため、不安に感じていたことについて聞き取りを行った。また、難聴の確定診断を受ける前から教育相談を実施している例を3事例まとめた。

2 新スクを受けた人数と相談開始月齢

平成29年7月1日の時点で、けやきルームには、53組（2歳児15組・1歳児26組・0歳児12組）の親子が通っており、新スクを受けた人数はFig. 1の通りである。また、Fig. 2は、けやきルームでの相談開始時の月齢である。1歳代、2歳代で教育相

談を開始する親子も多いが、これは、他の地域から転居してきたケースや、他の障害を併せもつケースが多く含まれている。

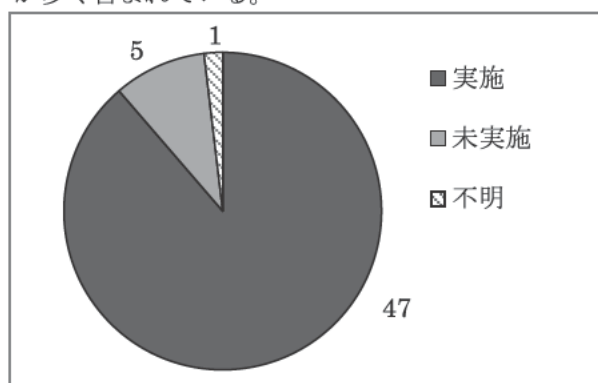


Fig. 1 新スクの実施数

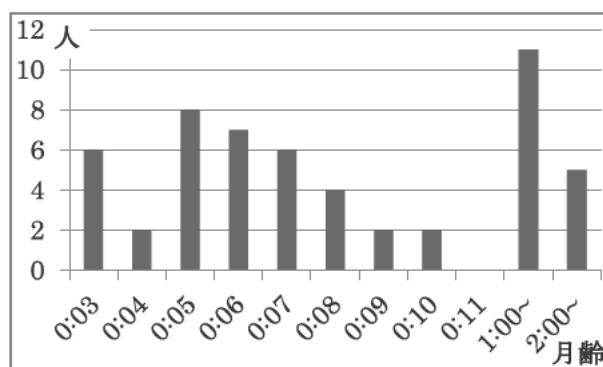


Fig. 2 相談開始の月齢と人数

3 誕生から相談開始までの流れ

けやきルームでの教育相談開始時に提出してもらう教育相談票を基に、誕生から教育相談開始までの流れについてまとめた。平成29年7月1日の時点で、

けやきルームに通う親子は千葉県在住者が多数であり、その他に東京都と茨城県の在住者が数名いる。居住地の違いなどから、親子によっては誕生から教育相談開始までの流れに多少の違いがあるものの、おおよそ、Fig. 3 のようにまとめることができた。



Fig. 3 誕生からけやきルーム利用開始までの流れ

まず、誕生後、数日のうちに新スクを受診した。新スクで要再検査（以下、リファア）となり、産科での1ヶ月健診時に再び聴覚の検査を行った。1ヶ月健診で再びリファアとなり耳鼻科を紹介され、予約を入れた。

耳鼻科での精密検査を受けた時の月齢は、生後3～4ヶ月が一番多い結果となった。つまり、耳鼻科での精密検査を受診するまでには、新スク後3～4ヶ月の期間があることになる。この間、療育や教育を一切受けていない親子がほとんどであった。耳鼻科での精密検査が一度では終わらず、数ヶ月後に再び検査を行った親子もいた。Fig. 4 は、耳鼻科で精密検査を受診した時の月齢をまとめたものである。

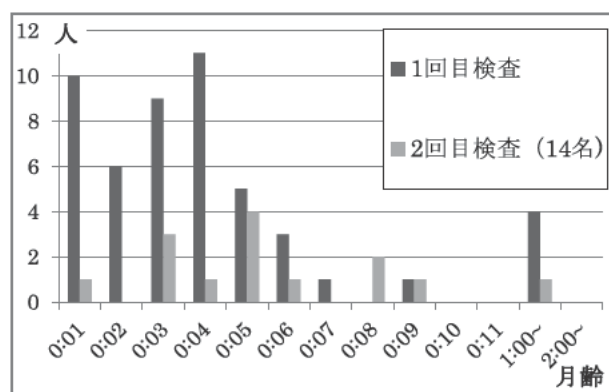


Fig. 4 耳鼻科で精密検査を受けた時の月齢

耳鼻科で精密検査を受診し、難聴の確定診断を受けると、教育相談機関として、けやきルームを紹介された。紹介を受け、保護者がけやきルームへ連絡をし、初回相談や見学を行い、その後教育相談が開始となった。Fig. 2 でも示したように、教育相談開始時の月齢は生後5ヶ月が最も多い結果となっている。

誕生から教育相談開始までの5ヶ月間、難聴の疑いを宣告されているにもかかわらず、療育や教育を一切受けていない家族がほとんどであった。その間の家族の不安な気持ちはとてつもなく大きなものであることが想像できる。ちなみに、けやきルームを紹介された親子は、その日のうちに、または数日の間に、けやきルームへ連絡を入れる親子がほとんどだった。ここからも、すぐにでも相談をしたいという、家族の不安や焦りを想像することができる。

4 母親の気持ちの変化

けやきルームに通う母親20名（2歳児母親9名、1歳児母親5名、0歳児母親6名）に個別面談（平成28年12月）の中で、「けやきルームに通う前に不安だったこと」、「現在不安に思うこと」について聞き取りを行った。その結果は次の通りである。

(1) 通う前に不安だったことについて

述べられた不安は、以下の3つに関するものが多かった。主な発言と共にまとめた。

①とにかく分からなかった。

「漠然とした不安しかなかった。」「何をすればいいのか、どう悩めばいいのかも分からなかった。」「祖父母も含め家族みんな不安しかなかった。」

②信じられなかった。

「受け入れるのに時間がかかった。」「間違いであることを祈った。」「ショックが大きく、自分を責めた。」「何度も聞こえを確かめては落ち込んだ。」

③先が見えなかった。

「将来の仕事や生活が想像できない。」「難聴児の育ちが想像できずネットで調べた。」

以上のことから、教育相談を受ける前は、漠然とした不安をもつ母親が多いことが分かった。自分の

12 乳幼児教育相談における母親の気持ちの変化

子どもの直接的な不安というよりも、難聴そのものへの不安や遠い将来への不安を述べる母親がほとんどであった。

(2) 現在不安に思うことについて

述べられた不安は、以下の4つに関するものが多かった。主な発言と共にまとめてみた。

① これからの成長。

「将来の自立に向けて、今この子にとって必要なことは何か。」「これからの育ち、全体的な発達。」

② 近い将来。

「幼稚園へ通うべきか、聾学校幼稚部へ通うべきか。」「これからの友達関係。」

③ 聴力、言葉、コミュニケーション。

「聴力の左右差。」「友達とのコミュニケーション。」「いつ頃から音声言語が出るか、どの程度会話ができるか。」「音声だけで会話ができるのか、手話が必要なのか。」

④ とりあえず安心。

「やるべきことが分かり、育児が楽しい。」「アドバイスを受けることができ、安心。」「心配なことはない。」「擬態語が出てきて、楽しい。」

けやきルームに通うようになり、我が子様子や成長に関する不安を述べる母親が多かった。「今の我が子にとって」という視点が強く、少し先の子どもの将来を想像した不安を述べていた。また、育児に対する悩みはあるものの不安は感じないと述べる母親も複数いた。

今回、母親の不安をまとめた結果、けやきルームに通う前は漠然とした不安が多いが、けやきルームに通うことで「我が子は」という具体的な不安へと変化していたことが分かった。このことから、難聴に対する漠然とした不安は早期からの支援によって和らげることができるといえる。

5 難聴の確定診断前の教育相談について

けやきルームに通う親子は、難聴の確定診断を受けた後、耳鼻科医から紹介を受けてくるケースがほとんどである。しかし、難聴の確定診断を受ける前に初回相談を申し込む親子もいる。昨年度から今年

度にかけては、難聴の確定診断前に初回教育相談を実施した例は、見学のみの相談も含め、7件あった。

けやきルームでは、確定前であっても教育相談を開始している。そのうちの3組の親子について報告する。

(1) 耳鼻科受診前に教育相談を開始したケース

新スクでリファーマーとなり耳鼻科を受診することとなったが、耳鼻科受診の前に保健師からけやきルームを紹介された。新スクの結果による母親の精神的ショックは非常に大きく、自分ではけやきルームへ連絡をすることができなかったため、保健師が直接けやきルームに電話連絡をした。その電話で、初回相談の日時を決定し、見学に来てもらった。初めて来校した時は、母子2人での来校であった。母親の表情は硬く緊張している様子で、口数も少なく、不安な事や心配なことを訴えてくる様子はなかった。活動の様子や幼稚部の様子を見学した後、いつでも教育相談を受けられることを伝えた。その後すぐに、教育相談の申し込みが母親からあり、現在も継続して通って来ている。

1年程度けやきルームに通っている現在は、母親の漠然とした不安は少なくなり、表情豊かに子どもと関わりながら、育児を楽しんでいる。

(2) 新スク後にインターネットで調べ、直接連絡をしてきたケース

耳鼻科での精密検査の予約待ちの状況で初回相談の申し込みがあった。母親自らインターネットを使って調べ、電話連絡をしてきた。初回相談は母子2人での来校だった。補聴器のことや聞こえの状態についての質問が多く、焦りの強い母親という印象をもった。ゆっくり丁寧に質問に応え、いつでも教育相談を受けられることを伝えた。その後、耳鼻科での精密検査を受診してから、教育相談の申し込みがあった。

不安や焦りの気持ちが強い母親であったが、2年程通った現在では、親子で見つめ合ったり笑顔でやりとりをしたりしながら、積極的に活動に参加している。また、人工内耳を検討していた時期は、やはり不安な気持ちが強くなったが、そのような時でも、

親子の笑顔は多く、実に楽しそうに遊んでいる様子が見られた。

(3) 耳鼻科医からの明確な診断を受けていなかったケース

新スク後、耳鼻科で精密検査を受診したが、医師からの明確な診断は出ないまま、けやきルームを紹介された。母親からの電話連絡で初回相談の日時を決定した。元々明るい様子の母親で、初回から、不安な気持ちを明るい口調でたくさん話していた。明るい口調ではあったが、親子の関わりや補聴器の早期装用、発達の遅れに対する不安など、様々な不安を抱えている母親であった。

教育相談を開始し数ヶ月経つと、母親の表情はそれまで以上に明るくなり、子どもとの関わりを楽しむ様子が多くなった。また、不安事を共有できる仲間の存在も大きかったようで、母親同士での会話も活発になっていった。その後、難聴ではないという診断を受け、教育相談を終了した。しかし、難聴ではないのであれば、発達の遅れがあるのかもしれないという母親の不安が大きくなり、「またいつか相談に来てもいいですか」という発言があった。「いつでも連絡をして下さい」と伝えたが、それ以降の連絡はない。

この3組の親子のように、早期から教育相談に通ってくることで、母親は少しずつ明るい表情へと変化していく。子どもとも笑顔で遊ぶ様子が多くなり、安定した親子関係が育ってきているように感じる。精神的なショックを抱えた母に対し、難聴の診断に関わらず、できるだけ早期からの教育相談は重要であると考えている。

6 おわりに

できるだけ早い段階から教育相談を実施することで、母親の気持ちが安定し、よりよい親子関係を育てることができると考えている。けやきルームでは、毎年2月に医師や保健師、教師や保育士などを対象とした「聴覚障害早期教育公開研修会」を実施しており、各分野とのネットワーク構築の機会となっている。耳鼻科医や保健師からは「難聴の確定前

から教育相談を受けることができるのは知らなかった」という声があり、最近では確定診断前に耳鼻科医から紹介される例や、保健師から紹介される例が少しずつ増えてきている。今後も各分野との連携を図り、早期からの教育相談を実施していきたい。

〔参考文献〕

- 橋本かほる・能登谷晶子・原田浩美・伊藤真人・吉崎智一（2015） 新生児聴覚スクリーニング後の療育支援体制に対する一考察. *Audiology Japan* 58,143~150.
- 泉信夫（2009） 新生児聴覚スクリーニング要精密検査児の母を支える－. *島根医学* 29(1),9~16.
- 佐藤正幸・小林倫代（2004）聴覚障害児の早期からの研究に関する文献的考察. *国立特殊教育総合研究所紀要* 31,91~98.
- 手塚清・館山千絵・森敬子（2017）乳幼児教育相談における自作教材を活用した親子の関わりについて－家庭での活用方法と保護者の記録を通して－. *筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要* 39,23-26.